

〈音〉と〈韻〉の間

——歌経標式を読む——

近藤信義

はじめに

古代和歌の修辞法というものに興味を向けて、いわゆる枕詞、序詞（歌）と呼ばれる言辞を追っている。これらの個々の事例の持つ表現を説明するとき、どうしても従属的になり勝ちなのが〈音〉の要素である。ことばは音と意味との両方の要素から成り立っていることは誰にも了解されているが、しかし、〈音〉の要素は説明方法が十分とはいえないと思われる。それは、意味は概念の領域であるから論理的にたどれるのに対して、〈音〉は生動的であるが故に一回的に消滅するという宿命を負っている為かとも思う。しかし、古代和歌をトータルに把握するためにも、意味と〈音〉との双方を対象化、方法化することが必要と考える。

〈音〉の要素は、資料として古代和歌のみならず、散文にも多く見られ、つまり、〈音〉の表現面での状況は多様に見出すことができ、これらをどのように見て取るかという方法が問題となる。そこで、この状況を二つの面からアプローチすることが必要と考える。一つは、実態的なありかたとして、〈音〉がどの

ように扱われているか、という側面。もう一つは、実態としてあるということは実は〈音〉を意識的に対象化しているのではないか、という創造的側面である。

しかし、この二つの側面は、それぞれ不即不離の関係であって、オーラルな環境の中で、自然発生的にあたかも言語上の生理であるかの如く生み出されてくる側面と、同じように意図的に〈音〉と意味との対応を作り出す方法をあたかも自然をよそおうように表出されている側面とを有していると言えるのである。

そこで、ここでは技法としての〈音〉の問題を考えてみたい。なぜなら、創造的側面として、明確に〈音〉を対象化して〈韻〉という概念を創造した奈良朝歌学が、同時代としての万葉集の内部に抱え込んでいる〈音〉の状況性とのような懸隔を有していたのかを考えてみたいからである。そのことよって、奈良朝歌学が果たした役割が以後の和歌表現になを齎したのかを考察する糸口になってゆくのではないかと考えるのである。

一、歌経標式

歌経標式は序文興付けによると宝龜三(七七二)年^たに上^たてまつられている。浜成の意図は序文によく表されているが、とりわけ「近代の歌人、歌句に長く^とと雖も、音韻を知らず」の批判は彼の主張がどこにあるかを明確にしている。この場合、「歌句」と「音韻」とが対比されていることに注目すれば、歌を構成する要素として「歌句」と、それ以外に「音韻」という概念が存在することに目を向けさせようとしていたことになる。

〈韻〉という概念は、言われる通り、中国詩における詩的條件を構成する意味以外のもう一方の要素である。詩を口吟する場合の中国詩が持つ言語的特質がそこにあり、調べの諧調、品位、整調が表出され、詩人の言語の音楽的感性が示されることになる。和語と漢語の絶対的差異は、漢語は一語一音一義という文字単位が明瞭であるのに対して、和語は一語が複数音で構成される場合が多く、あるいは、たとえ一音である場合もそこに多義的であるという特質を持っている。和語と漢語の異質性を浜成が踏まえないはずはないにも関わらず、〈韻〉にこだわった彼の意図は何であったのか。従来、歌経標式への批判はここに論議が集中する。

歌経標式へ向けられた批評の数々は、研究の都度ふり返られている。近年では野田浩子が古代文学誌¹⁾上で整理紹介した。また研究史上初めての注釈書である『歌経標式 注釈と研究』²⁾にも紹介があり、さらに最も近くには高田昇『万葉韻律考』³⁾にも紹介がある。これらを眺めると、次第にその評価に変化が

認められるようだ。つまり、従来中国詩の論理の当てはめゆえに根本的な誤りを犯したとする見解から、浜成の意図を、彼の時代の中で捉えようとする方向に視点が動いてきたことによる。

たとえば、野田浩子は音韻をとり上げた浜成の意図を「韻を問題にするのは歌を中国詩と同列に並べようとする⁴⁾こと、即ち国内のものとしてではなく世界的な位置づけをすること」と捉え、一つの批評基準の提示者としての浜成を見出そうとしている。平沢竜介は万葉集にも歌論的性情のあることに着目しつつ、しかし、なお万葉集、歌経標式の批評的環境が未成熟と捉え「当時の人々がいまだ和歌の実態にみあった、一般性、普遍性を持った批評基準を獲得することができなかったことを示しているのではないだろうか。」⁵⁾と述べ、歌の批評というものの時代の限界を見据えながら、歌経標式の存在を位置づけようとしている。このことは、浜成の問題意識をも含めて奈良朝後期の文学的批評を総体的に見直すことの必要性を示唆していることにもなり、今後なお検討の余地のあることを示している。高田昇は歌経標式の歌病論が中国詩論のあてはめにあるという従来の指摘を認めつつも、その歌経標式の歌論が本当に危ういものなのかを、具体的に万葉歌をとりあげて再検討し初めている。

右は、ごく最近の歌経標式をとりまく研究状況である。こうした研究の広がり、深まりの成果を期待する一方で、先に述べたように、歌の技法の問題として〈音〉の領域を対象としたとき、歌経標式がどのような意味を持つのか、一先ず歌式によりながら考えてみたい。

二、歌病と歌体（査体）

歌経標式は大きく歌病論と歌体論に分けて論じられている。歌病論の評判の悪さが歌経標式の全体の印象を覆っているといえようか。歌作の実際という面からは確かに現実無視と言われてもしかたのない立式と言える側面もあるが、一方、歌の批評という立場からは何らかの基準が必要となるはずである。そこに韻という詩を構成する要素の導入ということが図られることになると考えられる。歌が歌として成り立つ根拠としての韻に浜成は執着した。彼の最も重視している韻の基本は短歌の三句目と五句目即ち「本韻」と呼ぶところの呼応関係である。それは彼が選りだした歌病と歌体の例歌の内、得失を含め「離韻」「遍身」を除く全てが押韻の関係にあることによつてもうなづかれる。

和歌の「韻」の考え方は随所に説明されているが、原則は「歌体」三種の中に説かれている「求韻」の条にある。短歌の場合には三句目の尾字と五句目の尾字の音の呼応関係が本韻、長歌の場合は二句の尾字と四句の尾字、以下偶数句の尾字の呼応関係、他に「双本」（旋頭歌）の場合は三句目尾字と六句目尾字との呼応関係、韻の質的捉え方として「細韻・麁韻」とを示している。

歌病として七種の病名を上げている（これらの名字が中国詩からの当てはめという例証は既説に譲る）。これらの根拠作りはそれほど複雑なものではなく、先にあげた本韻を基準として上三句内部の問題（頭尾、胸尾）、下句の問題（同声韻）、全体の問題（腰尾、麁子、遊風、遍身）の三点である。本韻に次いで

各句の尾字が韻として重んじられる場所であるが、結局そこで問われる方法は助詞の用い方に同字の重なりを避けるという配慮に中心があることになる。（ただし、なぜそれが病なのかという根本的な説明はなく、従来もこの点に問題を投げかけていることは依然解消されているわけではない。）

歌体は査体と雅体とに分かれ、査体は不整備な例のもの、その内容は五七七の形体に欠陥のあるもの五種（離会、猿尾、無頭有尾、列尾、有頭無尾）、表現に欠陥のあるもの二種（直語、離韻）をあげている。このうち前者の形体の欠陥に関しては、とりあげた用例からみると、完成された五七七の形体が原則となっている点に、古代和歌生成史的視点が欠落しているといふものの、その反面そうした問題を考える場合の資料的意義を有しているといふことができよう。

後者の「直語」は表現が俗語であることを問題としているが、これも和歌表現史には常に正統と異端（諧謔）が併存するのであるから、浜成の和歌認識には俗語を排除する立場にあるところが窺えることになる。「離韻」は本韻（三句「初韻」と五句「終韻」の尾字）の呼応関係がばらばらなものを指す。これは浜成の和歌に対する韻の基本的な考え方を根拠としており、歌病の「同声韻」と関連が深い。その用例を見ると

〔同声韻〕見まほり我が思ふ君もあらずに何にか来けむ馬疲らしに（失）

〔離韻〕白波の浜松が枝の手向けくさいく世までにか年の経にけむ（失）

右のようにあつて、「同声韻」の場合は三句と五句の尾字が共に

「に」であって同声であることが病、したがって三句を「すぎにけり」と直すべきという。するとriとniとで同声韻が解消することになる。この同韻を構成することが浜成の和歌の押韻感覚の基本である。ただし、この「同声韻」は「巨病」とはしないという考えでもある。「離韻」の場合は三句と五句の尾字が「さ」と「む」であって同韻を構成しないという指摘である。こうした欠陥に注意を払わない歌人の歌に対して、浜成は「似歌能書」と批判する。つまり歌に似ているだけの書きものということなのだろう。こうしたところに浜成の音韻感覚は、歌が朗詠される場合の条件を考慮に入れていると思われる。

浜成の押韻の理論からいえば「離韻」は歌病と歌体（和歌としての表現形体）の双方をそこなうものという認識によるものであるから、彼の立式の中でも最重要な位置を占めるものである。しかし、この理論は後世への影響力をほとんど持たなかった。むしろ無視されていると行って過言ではない。たとえば古今集の巻一をざっと調査するだけでも、浜成の押韻理論を充たす例は六八首中三首のみ。この三首はむしろ偶然の一致のような数値である（次表の押韻適合例のあり方をも参考にしても、この点は結論が変わらない）。ちなみに、古今集に浜成が指摘している歌病がなんらかの影響を与えているか否かを、六歌仙および、貫之で調査してみると次のようであった。

- | | | |
|---------|---------------|---------|
| 遍昭 (17) | 歌病なし | 押韻適合例 4 |
| 業平 (30) | 腰尾 1 蟹子 1 (?) | 押韻適合例 5 |
| 康秀 (5) | 遊風 (2) | 押韻適合例 0 |
| 喜撰 (1) | 歌病なし | 押韻適合例 0 |

- | | | |
|----------|------------------------------|---------|
| 小町 (18) | 同声韻又ハ蟹子 1 腰尾 1 遍身 1 | 押韻適合例 1 |
| 黒主 (3) | 歌病なし | 押韻適合例 2 |
| 貫之 (102) | 頭尾又ハ蟹子 1 胸尾 3 腰尾 7 遊風 2 蟹子 1 | 押韻適合例 2 |

歌病説の反映をこの数字が示していると読むか、或いは無関係と読むか、かなり難しい内実を持っているといえるが、しかし、歌病内容の数値が意外に低いという有り方は、選歌の基準に歌病が案外無視されてはいなかったのではないかと予想もつけられそうにも思われる。ただし、歌病と歌の表現内容の好し悪しとは別次元ともいえるから、数値が低くとも病歌があることを示していることにもなる。この点は特に撰者の一人である貫之に歌病の数値が多いということにも表れていることになるだろう。

三、歌体（雅体）

雅体は十種あり、雅とする内容は表現の技法や方法を示している、それらの好ましいものの例を上げて基準名としている。その好ましきの基本は韻の位置であり、この原則は一貫している。先にのべたが、短歌にあっては一句と三句の各尾字、長歌にあっては二と四句、六と八句の各尾字の呼応関係であり、旋頭歌（双本）にあっては三句と六句の尾字である。

「聚蝶」の例は「み吉野をよしとよく見てよしと言ひしよき人吉野よき人よく見」の頭韻を踏んだ歌を例としている。この場合評価が頭韻と言うだけでなく、「よし」という好ましい語

が用いられていることも重要な要素となつていようだ。しかし、たとえば

「来むといふも来ぬときあるを来じと言ふを来むとは待たじ来じといふものを」(万4・五二七)の坂上郎女歌は、頭韻を踏んだ例とはいへ、字余り句を三つ有しているのだからおそらく評価をしないことになるだろう。また、「み吉野の」の歌が三、五句尾字に押韻関係にあることもこの歌が例歌として引かれる理由があることになるのであろう。

「謎譬」(べいひ)はなぞなぞ遊びのような雰囲気もあるが、歌の持つ暗示力を問題にしていると考えられる。おそらく「童話」などのように何らかの予兆的な意義(社会性)を発揮する存在を取り入れているのではないかと考えられる。

「双本」「短歌」「長歌」は歌体の問題。それに比して「頭古腰新」「頭新要古」「頭古要古」「古事意」「新意体」は表現技法を問題としている。

「頭古腰新」「頭新要古」「頭古要古」の「古」は「古事意」の「古事」と共通し、それは「腰新」「頭新」「新意体」の「新」と対比される概念であつて、表現方法において歌中に、古語的要素(枕詞、或いは序詞等を含めての慣用的な表現)を持つものの意である。それに対する「新」は、したがって実意的な表現を指していることになる。「頭」「腰」は句の位置であることは歌病におけると同じである。

四、技法と音

「頭古腰新」「頭新要古」「頭古要古」「古事意」に引かれた用

例はそれぞれ次のようである。傍線部で「古」とするものの位置を示しておく。

「頭古腰新」

a 梓弓引津の辺なるなのりそも花は咲くまで妹逢はぬかも

b 梓弓引津の辺なるなのりそが花は咲くまで妹に逢はぬか

「頭新要古」

c 秋山のみち始むる白露のいちしろきまで妹に逢はぬかも

「頭古要古」

d あをによし奈良山峽よ白たへにこのたなびくは春霞なり

「古事意」

e 風吹けば雲の蓋(きぬがき)竜田山いとははせる朝顔が花
右のbはaの例歌において制(光仁帝のおおせごと)を受ける
に、三、五句が同字同韻、また「なのりそも花は咲くまで」の
表現が穏やかでない故に、bの如くに訂正があつたとするものである。ここに言辭(表現)に対する批評、及び押韻への配慮が見られ、それが浜成一人の主張ではないことが窺われるところである。

ここで「頭古」とするところの歌経標式の説明は次のようである(所謂枕詞と被枕詞の部分だけに限定して抜き書きする)。

「梓弓はこれ古事の喩にして、引津はこれ喩の名なり……

梓弓は絃木の名、引津は井の名……以て引きの喩を陳

べまく欲りするが故に、梓弓を発句に陳べて古事とし、弓

を以て引きの名を顕す……」

右の説明内容は次のc d eにも共通するので、その内容を押しえておくと、

梓弓 Ⅱ 古事の喩 (Ⅱ絃木の名)

引津 Ⅱ 喩の名 (Ⅱ井の名)

となり、これは次のように言い直すこともできる。即ち喩えるもの(古事の喩)と喩えられるもの(喩の名、名は言葉そのもの)の関係にあると。この二つの関係を浜成は「・・・以て引きの喩を陳べまく欲りするが故に、梓弓を発句に陳べて古事とし、弓を以て引きの名を顕す」と言う。つまり、「引津」の「引き」を「陳べ」たいために古事(古語的表現)である「梓弓」を上句に据え、「弓を以て引きの名を顕」したのだ、と言うことになる。

喩えるものと喩えられるものの関係は浜成の認識にあつては、慣用的であることを条件として見え、それはcの場合「白露の」、dの場合は「あをによし」と「しろたへ」の句の引用や、eの「風吹けば雲のきぬがさ竜田山・・・」の序詞表現の例に示されていると言える。こうした表現の慣用性の認識は、時代の和歌修辭観(多くの万葉歌の実例を背景とした場合)を代表していると考えてよいであろう。

おわりに

ここで重要な問題はa bの「梓弓引津」とeの「風吹けば雲のきぬがさ竜田山・・・」の説明である。つまりこの二つの用例が示す修辭的内容に対して浜成の認識が、意味を越えて〈全音〉の領域にとどまっているか否かの問題なのである。

「弓を以て引きの名を顕」すとは、「梓弓引津」の表現の中で「弓」と「引き」の主述の関係、縁語的關係などを指摘出来るが

それらを排して、「引き」という言葉を顕すために「弓」を必要としたのである。この限定的な着眼は評価されるべきだろう。つまり、これは「弓(を)引き↓引津」という、同音を利用した意義転換への導入を見ていることになるからである。あるいはそれは、例えば「こらが手を巻向山」(万7・一〇九二)、「たまくしげ二上山」(万17・三九八七)、「とほつひと松浦の河に」(5・八五七)のような諸例に適用できる考え方である。またeの「風吹けば雲のきぬがさ竜田山・・・」の場合も、万葉集の類似句、例えば「海の底沖つ白波竜田山」(1・八三三)や伊勢物語・古今集の「風吹けば沖つ白波竜田山」(古18・九九四)などを合わせ見ても、「きぬがさ(が)顕つ↓竜田山」、「白波(が)立つ↓竜田山」にも同様に適用できる。

ただし、これは韻の問題ではなく、〈音〉の問題である。一首の歌のどこで〈音〉が放出されるか、その位置の問題である。この枕詞・序詞が見せる「音」の表現構造は、古代和歌内部に生成していったわば和語の持つ言語の生理的要素ともいえる問題であり、ここから和歌の技法としての〈音〉の問題が拓けてくると考えられるところである。

歌経標式が主張した歌の〈韻〉は、一首の歌の内部に音の呼応關係を創造することによって、日常言語を越えた詩的構成要素を見出すことであつた。その意図の面白さは評価しえても、やはり、韻の概念と理論は外側からのインパクトであつたところに、和歌においての限界があつたといえる。この批判は従来も言われていることがらである。ただし、「頭古腰新」「頭新要古」「頭古要古」「古事意」に引いた用例とその説明を検討する

とき、和歌内部に醸成していたころの、枕詞・序詞の〈音〉の構造を見出しかけていたことは、歌論の始めとして意義ある項目であるといえのではないかと考える。

- 注(1) a 野田浩子『歌経標式』の和歌観——導き出された〈ころ〉——(古代文学20号 昭和五六年三月)
 b 野田浩子『詩語』としての和歌表現——『歌経標式』の模索——(古代文学23号 昭和五九年三月)
 (2) 冲森卓也・佐藤信・平沢竜介・矢嶋泉 著『歌経標式』注釈と研究(桜楓社 平成五年五月)
 (3) 高田昇『万葉韻律考』(和泉書院 一九九四年三月)
 (4) 野田浩子注(1) a 論文
 (5) 平沢竜介『歌学書としての『歌経標式』』(注2所収)
 (6) 注(2) 著書の注釈部に紹介がある。なお、以下、『歌経標式』の字句、文章の引用は、注(2) 著書の校訂本文に拠った。
 (7) 拙稿『〈音〉の構造——古代和歌の修辞法の基礎』(古代文学31号 一九九二年三月)

第三十三号 一九九四年三月 五日 発行

特集・八世紀のエクリチュール

『日本書紀』と記述……………多田 元…2

——漢文による書記行為——

文字の誘惑……………丸山 隆司…12

古事記序文に於ける〈心〉の位相……………
 ——和語を書く「よむこと」の生成と起源——

……………岩本 武…23

「らし」のエクリチュール……………清水章雄…33

——古事記の〈文字〉から宣命の〈文体〉へ——

雑 東アジアのなかの憶良……………東 茂美…45

播磨国風土記・佐比岡伝承考……………飯泉 健司…57

——風土記説話成立の一過程——

「縁起」と〈寺院縁起〉概念をめぐる……………

——八世紀の古代文学の生成の一側面——

……………山口 敦史…74

会報……………

例会からの時評……………

'93夏季セミナー報告……………

会員名簿……………

97 90 88 86